

FLORA KANAGAWA

Jun. 6. 2012 No.74

神奈川県植物誌調査会ニュース第 74 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp

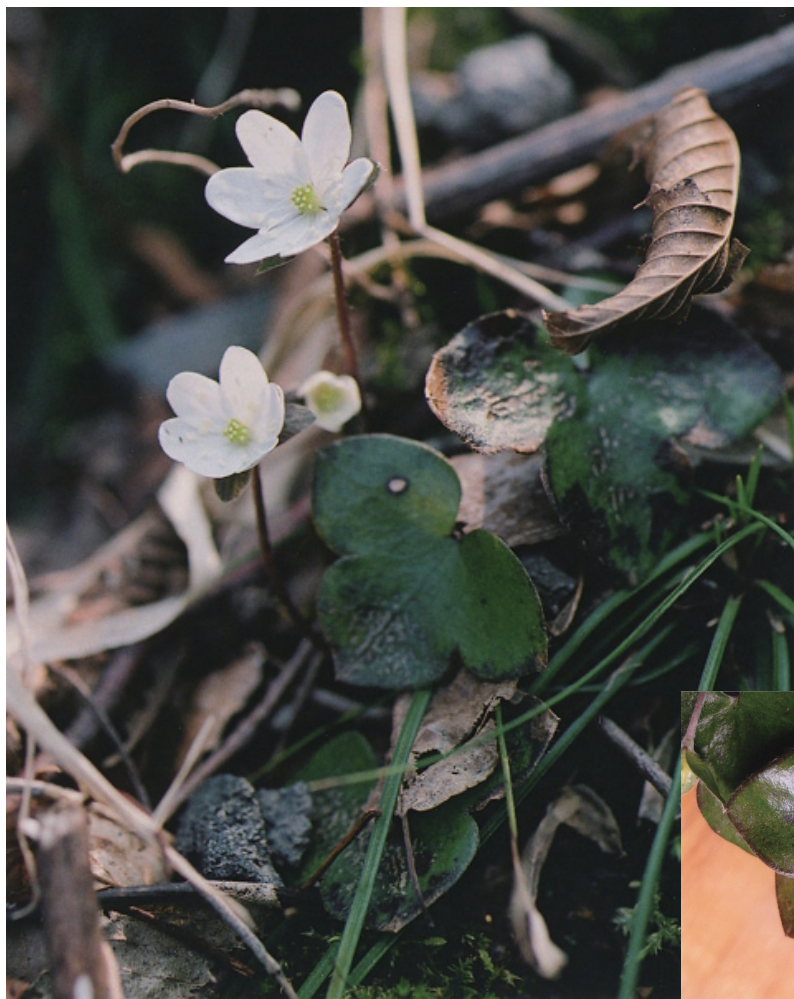


図 1. アシガラスハマソウ（仮称）（南足柄市 2012 年 3 月 25 日 大野好弘撮影）。

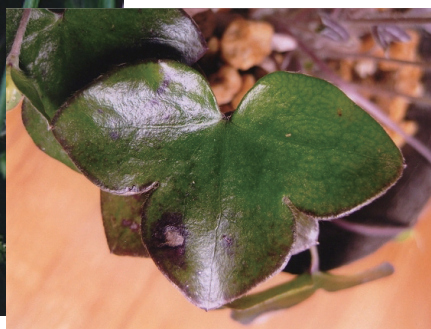


図 2. アシガラスハマソウの葉（南足柄市採集の栽培品 2012 年 3 月 26 日 大野好弘撮影）。

アシガラスハマソウ（仮称）の発見 （大野好弘）

南足柄市の山中にて、スハマソウ属 *Hepatica* の植物を発見したので報告する（図 1）。発見地は箱根外輪山の一部であり、南東の急斜面に 200 株ほ

どが群生していた。『神奈川県植物誌 2001』によると、県内にはこれまで、ミスミソウ *Hepatica nobilis* Schreb. var. *japonica* Nakai form. *japonica* が丹沢、大山などに、スハマソウ *Hepatica nobilis* Schreb. var. *japonica* Nakai form. *variegata* (Makino) Kitam.

が鎌倉市、横浜市、逗子市に、それぞれ知られているが、今回発見した場所は、これらの県内既知産地と離れている。さらに、『神奈川県植物誌 2001』のミスミソウ、スハマソウの記載とは、複数の形質で形態が異なる（表 1）。これらのことから、今回発見

した植物をアシガラスハマソウ（仮称）とし、さらなる分類学的検討を進めたいと考えている。

標 本： 南 足 柄 市 大 野 好 弘 2012.4.17 KPM-NA0201685.

表 1. ミスミソウ、スハマソウとアシガラスハマソウ（仮称）の形態の違い。

	ミスミソウ	スハマソウ	アシガラスハマソウ（仮称）
根生葉の形状	やや革質で裂片の先は普通尖る	裂片の先は尖らず鈍い	光沢があり裂片の先はやや尖る（図 2）
花弁状萼片の形	長楕円形	卵形～狭卵形で丸みがある	卵形で丸みがある
花弁状萼片の色	象牙色まれに淡紅色	白色	純白色
花弁状萼片の数	10 ～ 12 個	6 ～ 8 個	6 個まれに 7 個

※ミスミソウ、スハマソウの形態は、『神奈川県植物誌 2001』より引用。

神奈川県新産のオオハタガヤ

（勝山輝男）

酒井藤夫さんが相模原市緑区三井で不明のカヤツリグサ科植物を採集された。市街地に 1 本だけ生えていたものを標本にされたとのことであった。一見するとテンツキのように見えたが、鱗片に密に細毛が生えていた。瘦果を取り出すと、花柱は落ちやすく、花柱基部が瘦果の頂に瘤のように残っている。テンツキ属 *Fimbristylis* ではなく、ハタガヤ属 *Bulbostylis* と分かった。ハタガヤ属であれば、それほど種数は多くはない。中国植物志（Tang and Wang, 1961）や Flora Thailand（Simpson and Koyama, 1998）に図があり、アジア・アフリカの熱帯に広く分布する *Bulbostylis puberula* (Poir.) C. B. Clarke であることが判明した。念のため、国内の記録はないか調べたところ、千葉県船橋市長津川親水公園で、植え込み材料にヤシ殻を使った花壇に発生したことが報告され、オオハタガヤの和名がつけられていた（大場・木村, 2002; 谷城, 2003）。以下、採集された標本に基づいた形態を記録した。

Bulbostylis puberula (Poir.) C. B. Clarke in Hook.f., Fl. Br. Ind. 6: 652 (1893). (図 1)

1 年草。高さ 15 ～ 25cm、葉は基部の鞘のみで、葉身はほとんど発達せず、細毛が疎らに生える。花序は数個から 10 数個の小穂がやや密集し、苞葉は葉状で花序より少し長い。小穂は枝に単生し、長卵形で長さ 3 ～ 4mm、数個 ～ 10 数個の鱗片を螺旋状につける。

鱗片は広卵形で竜骨が発達し、長さ 1.5 ～ 2mm、赤褐色を帯び、細毛が密生し、竜骨部分は淡色で先は突出する。雄しべは 1 本。瘦果は広倒卵形で 3 稜があり、長さ 0.7 ～ 0.8mm、淡黄褐色、不明な横皺があり、頂部に花柱基部が瘤状に残存する。

標 本： 相模原市緑区三井（TS-5）酒井藤夫・啓子
no.44047 2011.9.11 KPM-NA0165999.

文献

Tang T. and F. Wang, 1961. Cyperaceae. Chien S. and W. Chun ed., Flora Reipublicae Popularis Sinicae 11. 261pp. Science Press, Beijing.

大場達之・木村陽子, 2002. 船橋市の植物。船橋市内環境調査報告書（本編）, pp. 212-342. 船橋市環境部環境保全課, 船橋。

Simpson D. A. and T. Koyama, 1998. Cyperaceae. Santisuk T. and K. Larsen ed., Flora of Thailand 6, 4: 247-485. The Forest Herbarium, Royal Forest Department, Bangkok.

谷城勝弘, 2003. カヤツリグサ科。千葉県史料研究財団編, 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県の植物誌, pp. 816-898. 千葉県, 千葉。

神奈川県産樹木 4 種の分布落穂拾い

（田村 淳）

『神奈川県植物誌 2001』の分布図を眺めていると多くのことに気づく。例えば冷温帯性樹木のウラジロ

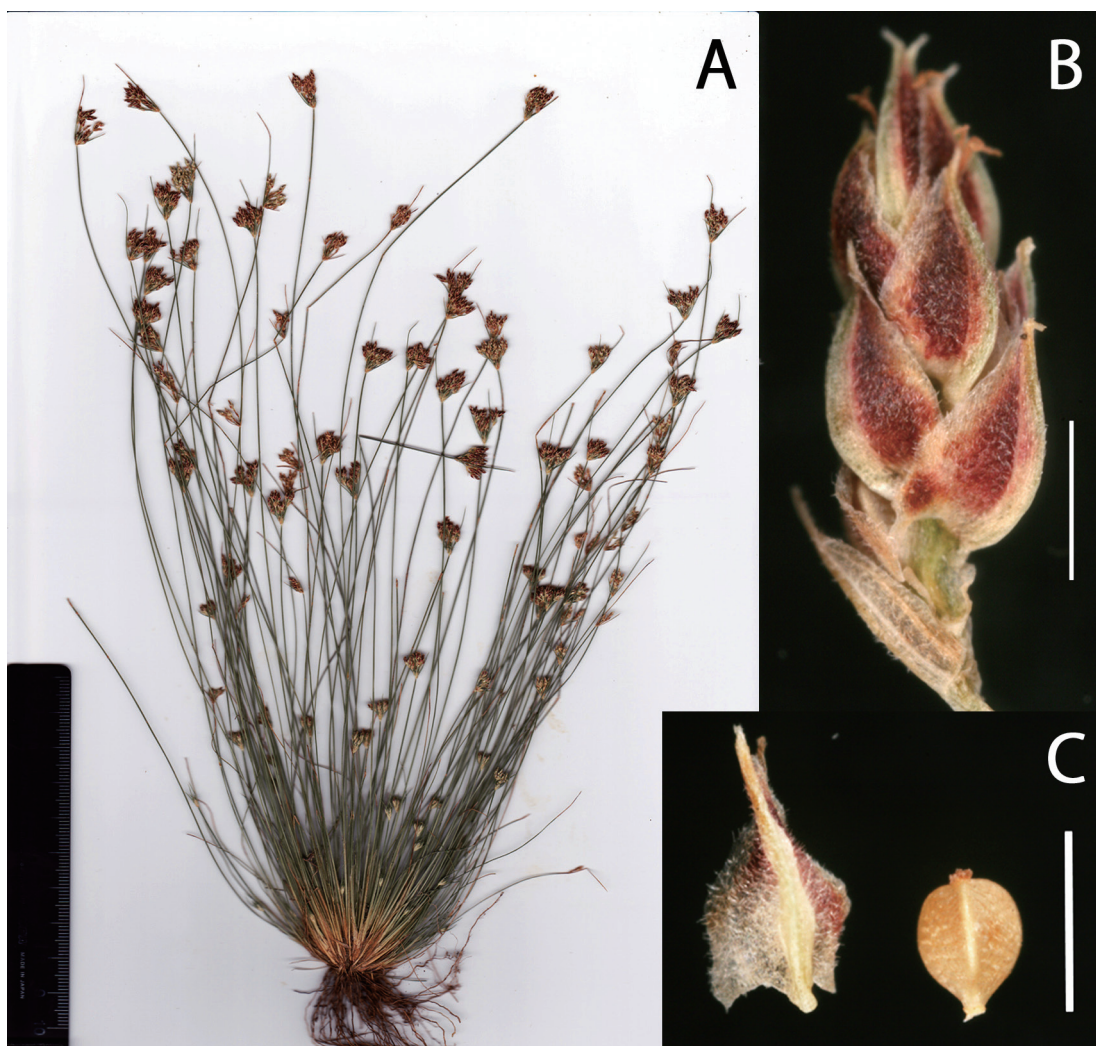


図 1. オオハタガヤ *Bulbostylis puberula* (Poir.) C. B. Clarke

A: 全形, B: 小穂, C: 鱗片 (左) と瘦果 (右), B, C ともにスケールは 1mm.

モミヤミズメ, オオヤマザクラなどの分布点が丹沢の大山山頂 (標高 1,252m) 付近に無いことや, 溪畔林構成樹木のサワグルミの分布点が丹沢では普通にあるのに対して, 箱根では金時山にあるのみだったり, 小仏山地 (神奈川県側) では全く無かったりすることである. 分布点が無いことの理由として, 地史や人間の土地利用による淘汰圧, そして調査努力量が増えられる. 前の 2 つは頭を使う困難さがあるが, 調査努力量は体を使えば解決する容易さがある. そこで, 私は次に掲げる樹木についての分布の落穂拾いをしたので報告する.

1 ①. 大山のサワグルミ

サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Siebold & Zucc. は県内では丹沢山地の標高 1,000m 以上の沢筋や崖錘斜面, 山頂緩斜面に普通に分布する種であるが, 大

山では記録がなかった. そのサワグルミを大山周辺の 3 箇所で確認した. うち 2 箇所は大山から北西方向に伸びる尾根上の標高 950m 付近と 1,000m 付近である. 標高 950m 付近では土壌の厚い斜面上に 2 本あり, 胸高直径はいずれも 60cm 程度であった. 標高 1,000m 付近では崖錘斜面上に約 30 本が生育していた. 胸高直径は 20 ~ 80cm で 60cm 程度の個体が多かった. 林下にはチドリノキとオオバアサガラ, 林床にはヤマシャクヤクとタバコモミジガサ, サワグルミの樹幹にはオシヤグジデンドが生育していた. もう 1 箇所はミズヒの頭北西尾根の標高 1,030m 付近である. 土壌の厚い緩斜面上に 9 本あり, 胸高直径は 25 ~ 70cm であった. 周囲にはハリギリやケヤマハンノキ, チドリノキ, 林床にはマツカゼソウがあった.

標本: 秦野市寺山大山北西尾根 (標高 950m) 田

村 淳 TA11048 2011.10.14 KPM-NA0166096；秦野市寺山大山北尾根（標高 1,000m）田村 淳 TA11051 2011.10.14 KPM-NA0166099；清川村煤ヶ谷ミズヒノ頭 田村 淳 TA11063 2011.10.14 KPM-NA0166092。

1 ②. 箱根のサワグルミ

サワグルミは箱根では非常に稀な種である。上述のとおり箱根では金時山に記録があり、採集された標本（金時神社 浜中義治 1990.11.1 KPM-NA1103378）が県立生命の星・地球博物館に残されている。また標本の所在は不明であるが須雲川の登沢や唐沢、中清水沢、上二子山の記録がある（井上ほか, 1991）。これらの記録から、箱根で溪畔林が発達しているような須雲川本流の大沢にはサワグルミがあることを予想できた。そこで、実際に 2011 年 5 月に探索したところ、標高 680m 付近の土石流段丘上にサワグルミが 1 株 2 本あることを確認した。両方とも胸高直径は 40cm、樹高は 20 m 程度であった。周辺にはミズギがあり、亜高木層にはチドリノキ、低木層にはコクサギとスズタケ、草本層にはジュウモンジシダやタニギキョウ、ゴマキがあった。大沢沿いを歩き通したがサワグルミはこの 1 株のみであった。なお大沢の溪畔林は土石流段丘上に成立したものが多く、構成種はイタヤカエデ（オニイタヤ）を主体として、ケヤキやフサザクラ、チドリノキなどであった。

標本：足柄下郡箱根町須雲川大沢 田村 淳 TA11005 2011.5.6 KPM-NA0166066。

2. 愛川のカツラ

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold & Zucc. は県内では丹沢山地を中心に分布し、相模川以東の平野部や、横須賀の大楠山南面の沢にもある樹木である（田中, 2001）。しかし、平野部のものは植栽起源の可能性が指摘されており、自生の標本が確認されたのは丹沢山地のみであった（田中, 2001）。私は、丹沢山地では、これまでに犬越路南面や神ノ川彦右エ門谷左岸斜面、蛭ヶ岳北側の地蔵平、早戸川中ノ沢、早戸川荒沢、水沢川伊勢沢、堂平、本谷川流域、大洞沢で見たことがあった。新たに愛川町内の中津川支流大沢の標高 300m 地点で 1 株を確認した。この株は、以前から宮ヶ瀬湖畔を車で通行する度に気になっていたものである。2011 年 3 月に実際に根元まで足を運び確認したところ、まさしくカツラであることが分かった。1 株 2 本の個体であり、胸高直径は 60cm と 40cm、樹高は 20 m であった。この生育立地は沢の源頭部の急斜面であり、自生株であると判断した。周辺にはフサザクラとチドリノキがあり、下層にはアオキとアブラチャンがまばらに生育してい

た。標高 300m でのカツラの自生は珍しいと思う。

標本：愛川町半原大沢 田村 淳 TA11040. 2011.8.30 KPM-NA0166048。

3. 大山のダケカンバ

ダケカンバ *Betula ermanii* Cham. は一般に亜高山帯性樹木であり、亜高山帯に届かない丹沢では鍋割山や丹沢山、蛭ヶ岳などで記録がある。そのダケカンバが大山北尾根の地獄沢源頭部の崩壊地際に 1 本あるのを確認した。胸高直径は 30cm であった。このほかにも袖平山北尾根や水晶沢ノ頭付近でも見たことがある。

標本：秦野市寺山大山北尾根 田村 淳 TA11060 2011.10.14 KPM-NA0166095。

4. 西丹沢三国山以北のハコネグミ

ハコネグミ *Elaeagnus matsunoana* Makino はフォッサマグナ要素の樹木であり、県内では箱根と丹沢の不老山～三国山の尾根に分布する（高橋, 2001）。そのハコネグミの生育を三国山以北でも確認した。合計で 2 本あり、1 本は三国峠～鉄砲木ノ頭、もう 1 本はバラシマ峠～富士岬平の山梨県側にあった。後者の個体についてはすでに 2010 年に勝山輝男氏が気づかれていたようである（勝山私信）。御坂山地の分布（高橋, 2000）へと続く新産地である。同様の分布を示すものにサンショウバラがある（田村, 2010）。なお、ハコネグミが富士岬平以東の県境稜線に分布する可能性はあるが、それについての調査は今後の課題である。

標本：足柄上郡山北町三国峠～鉄砲木ノ頭 田村 淳 TA11010 2011.6.10 KPM-NA0166061；山梨県南都留郡山中湖村バラシマ峠～富士岬平 田村 淳 TA11015 2011.6.10 KPM-NA0166045。

文献

- 井上香世子・中村和義・高橋 勉, 1991. 須雲川流域の植物相。箱根線 No.391 ～ No.447 地域環境事前調査委託報告書, pp.41-125. 東京電力（株）松田工務所・東電設計（株）, 松田。
- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1580pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原。
- 高橋秀男, 2000. グミ科。樹に咲く花 離弁花②。pp.556-587. 山と溪谷社, 東京。
- 高橋秀男, 2001. グミ科。神奈川県植物誌 2001. pp.1004-1008. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原。
- 田村 淳, 2010. サンショウバラは丹沢の三国山以北にもある。Flora Kanagawa, (69): 840-841.
- 田中徳久, 2001. カツラ科。神奈川県植物誌 2001. p.681. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原。

大和市・泉の森にセリモドキ

(馬場しのぶ)

2011年の5月半ば頃、泉の森に見慣れないセリ科が出ていと連絡が入った。泉の森植物調査班ボランティアとして、熱心に観察を続けていらっしゃる有馬由紀子さんと土井節子さんが気が付かれたとのこと。

6、7年前から植物相調査に関わって来たが、セリ科はありふれた種ばかりしか出ていない筈。わからないセリ科って何だろう？興味津々で現地に行ってみると、山野草園と名付けられ、周囲を柵で囲われた草地の奥にひょろりと立った1本の草が目についた。草丈は90cm～100cmくらいだろうか。葉は2回羽状複葉で、質は薄く、無毛で少し光沢がある(図1)。ヤマゼリに似ているが、小葉の裂れこみが深く、草姿全体の感じが微妙に違う。図鑑で調べると限りなくセリモドキに近い。“セリモドキ！！”だといいなと期待が高まった。なんとしても葉だけでの判断は難しいので、花が咲くまで待つことにしたところ、8月下旬、見事な複散形花序の花が咲いた。花卉は白、長い5本の雄蕊が目立つ。長三角形の小さな萼歯があり、線形の総苞、小総苞片があるなどの特徴から、セリモドキと確信できた。

セリモドキ *Dystaenia ibukiensis* (Y.Yabe) Kitag. は、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』(高桑ほか編, 2006.) では絶滅危惧 I A 類とされている。『神奈川県植物誌 1988』(神奈川県植物誌調査会編, 1988) では横浜市緑区、旭区、保土ヶ谷区で記録され、1988年に大和市中心林間で確認されて以来、その後の記録はない。10月、十分に果実(図2)が熟すのを待って標本を採集し、生命の星・地球博物館の勝山輝男学芸員に同定していただいた。

その後、園内にもう1か所、まだ花茎を立ててない5、6株のセリモドキが生育していることが確認され、草刈をされないよう、杭で囲って保護している。



図1. セリモドキの葉 (大和市泉の森 2011年10月27日 馬場しのぶ撮影)。



図2. セリモドキの果実 (大和市泉の森 2011年10月27日 馬場しのぶ撮影)。

標本：大和市泉の森 馬場しのぶ 20011.10.27 KPM-NA0201686.

愛川町でニッポンイヌノヒゲを採集

(諏訪部 晶)

ニッポンイヌノヒゲ *Eriocaulon hondoense* Satake はホシクサ科ホシクサ属の1年草で、『神奈川県レッドデータ生物報告書 2006』では絶滅と判定されていたが、愛川町尾山耕地の水田で発見したので報告する。

筆者は、愛川町尾山耕地でのトンボ調査(4月～12月の間に10日ごとのルートセンサス)を実施している。稲刈りがまばらに行われている2011年10月17日の調査時に、町道が開通し車の往来によりトンボの飛翔が少なくなった区画を歩いていたら、イネの間に立派なホシクサが目に入った。以前採集したものより大きくしっかりしていたので、“行きがけの駄賃”とばかり採集して、トンボ調査を続けた。



図3. ニッポンイヌノヒゲの標本 (愛川町尾山耕地 2011年10月14日採集 諏訪部 晶撮影)

この時はホシクサとばかり思い、頭花の方へは目が行かなかったのだが、12月20日に行われた厚木植物会の同定会に参加するにあたって、今年採集した標本を見直したところで、ホシクサとしていた該当標本がニッポンイヌノヒゲであることに気付いた。ただイヌノヒゲとの見分けが今一つはつきりせず、生命の星・地球博物館の勝山輝男学芸員にニッポンイヌノヒゲと

同定をしていただいた。

後日ニッポンイヌノヒゲを探したが、田起こしも行われており発見することができなかった。偶然の発見であつたため生体写真も撮っておらず、2012年の再発見を期待したい。

標本：愛川町尾山耕地 諏訪部 晶 2011.10.14
ATM5678

相模原市内でキダチノネズミガヤを採集

(諏訪部 晶)

キダチノネズミガヤ *Muhlenbergia ramosa* (Hack.) Makino は『神奈川県レッドデータ生物報告書 2006』では絶滅危惧ⅠBとされ、相模原市内の記録がなかったが、2011年9月8日に採集したので報告する。

場所は相模原市緑区根小屋の小倉山林道起点付近の沢沿いで、群生していた。採集当初はネズミガヤ類として保留していたが、生命の星・地球博物館の勝山輝男学芸員に同定をしていただきキダチネズミガヤであることが明らかとなった。

標本：相模原市緑区根小屋 諏訪部 晶 2011.9.8.
ATM5969 (図1)



図1. キダチノネズミガヤの標本（相模原市緑区根小屋 2011年9月8日採集 諏訪部 晶 撮影）

相模原市・愛川町でハイチゴザサを採集

(諏訪部 晶)

ハイチゴザサ *Isachne nipponensis* Ohwi は『神奈川県レッドデータ生物報告書 2006』では絶滅危惧Ⅱ類とされ、相模原市緑区（旧津久井町）の記録はなかったが、2011年9月8日に相模原市緑区根小屋及び愛川町尾山で採集したので報告する。

場所は小倉山林道起点付近から沢沿いにくだり、

沢を渡ったあたりの道で、張り付くように点々と生育していた。『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』



図1. ハイチゴザサの標本（愛川町尾山 2011年8月26日採集 ATM 5607 諏訪部 晶 撮影）



図2. ハイチゴザサの標本（愛川町尾山 2011年9月8日採集 ATM5614 諏訪部 晶 撮影）

の「生育環境」には湿地や水田に群生とあるが、根小屋では木漏れ日とところどころ差し込む沢沿いの小道に生育し、愛川町尾山耕地では、沢沿いに10mほど登ったところ（幡の坂の中腹）の崖から染み出す水でぬかるんだ道に生育しており、いずれも水田内ではなかった。8月26日の観察では出穂していな

かったが、9月8日にはしっかり穂を出していた。ここは草刈りが行われるが、絶えることなく生育している。

標本：愛川町尾山耕地 諏訪部 晶 2011.8.26. ATM5607（図1）；愛川町尾山耕地 諏訪部 晶 2011.9.8. ATM5614（図2）；相模原市緑区根小屋 諏訪部 晶 2011.9.8. ATM5969.

川崎市多摩区や宮前区でもクゲヌマラン大量に発生

（支倉千賀子）

数年前に横浜市金沢区でクゲヌマラン *Cephalanthera shizuoi* F.Mack. が大量に発生していることが報告されました（金子, 2005；Flora Kanagwa(60)）が、2011年5月9日に川崎市多摩区および宮前区の2地点で、団地内の緑地や公園の植栽樹木の下にクゲヌマランが多く発生しているのを確認しましたので報告いたします。

それぞれ以前からキンランやギンランが生えているという情報があり、5月の2週に訪れるようにしていましたが、今年はちょうど開花を観察することができクゲヌマランも混ざって生育していることが分かりました。

クゲヌマランはギンランに比べ葉の基部が平坦で花弁の距は短いのが特徴ですが、生育している植物体の葉は細長く表面につやがあり、葉縁が波打ってやや革質であることも分かりました。

宮前区の生育地の状況

横浜市との境界に近い菅生緑地の植栽されたマテバシイやクロマツなどの下に、キンラン（開花1株）、ギンラン（開花50株未満）とともに、クゲヌマラン（開花50～100株）を確認しました。柵がないため人の立ち入りが自由で、植栽樹木の下は裸地が多く他の草本植物の生育は限られていました。周辺には今でも二次林が多少残り、キンランやギンランの生育は自然林（二次林）内にもみられます。クゲヌマランは公園のマテバシイなどの植栽木の下だけで観察されました。

多摩区での生育状況

多摩区北部の西三田団地内の芝生の中にクゲヌマラン（広範囲の複数地点で開花100株以上）を確認しました。まとまって多く生えているところは限られ、1～数本程度の生育地点は団地内の緑地（植栽地）に点在します。団地周辺には20年ほど前まで二次林が残っていましたが、現在は名残程度のものしかなく、団地内の緑地のほとんどは造成後にコナラ、クヌギ、スダジイ、ケヤキ等の樹木を植栽したところです。

団地内にはキンランの生育もみられますが、これは植栽された樹木が成長し、環境が合うようになったと

ころで、どなたかが持ってきて植えたものから種子繁殖した可能性が高いと考えられます。キンランの発生密度が高いところに、植えられたものと思われるシュンランがあり、山野草が好きで植えていらっしゃる方がおられる様子でした。また、1～数本程度の生育地点では植栽したと思われる生え方をしているものもありました。

クゲヌマランは団地内の数ヶ所の芝生に高密度、広範囲で発生し、キンランとは明らかに違う環境を好むようです。芝生一面に大量に発生しており、キンランのように植栽されたものから増えたかどうかは分かりませんが、団地内の他の場所に1～数本程度生育しているものの中には植栽したと思われるものもありました。



図1. クゲヌマラン（川崎市宮前区水沢 2011年5月9日 支倉千賀子撮影）

ダールベルク・デージーの逸出帰化品 (林 辰雄)

2011 年 9 月 16 日、ダールベルク・デージー *Thymophylla tenuiloba*(CD.) Small の、逸出帰化品と思われるものを観察したので報告します。

場所は横浜市栄区中野町の本郷小学校近くの空き地で、1 × 2m ほどの面積に約 30 株が見られた。株は高さ 15cm くらいで横に広がり、茎も葉もいたって繊細で、茎葉は互生、下部につく葉は 5 裂、上部の葉は 3 裂、茎は途中で分かれ茎頂に直径 16mm ほどの鮮黄色の花をつける。舌状花は 8 ~ 13 個。先端は 2 浅裂。そう果には 2.5mm ほどの冠毛がある。近くに栽培している所は見あたらず、砂礫の多いこの場所で栽培しているとは考えられないので、種子が飛んできて育ったものと思われる。

原産地は中央アメリカ、多くの植物を記載紹介している『日本花名鑑 1』(アボック社)にも記載されていて、今は販売している園芸店も多い。栽培書には過湿に弱乾燥には比較的強いとあるように、生育していた場所は大きな砂利の敷き詰められたところで、猛暑日の炎天下でもしおれることもなく元気に花をつけていた。

この植物については、岩槻 (2010) が、野田市船形で野生状のものを観察し、報告している。また、私の住居の近くの方から、2 年ほど前に、何もしない鉢から芽がでて、花が咲いたけど、何でしょうかと聞かれたことがある。荒地に手入れもされない状態で花を咲かせている、という報告もあり、そんなことから外見は繊細でも、この植物はかなり丈夫なもので、気をつけてみればより多くの場所で見つかるかも知れない。これからも分布を広げてゆくものと思われるので、推移を見守ってゆきたい。

※編集担当注：生命の星・地球博物館には以下の横浜市内産の標本が収蔵されている。

標本：横浜市泉区下飯田町 野津信子ほか 2010.7.6
KPM-NA0164905；横浜市中区日本大通 松本雅人 2011.6.26 KPM-NA0147360。

文献

安藤敏夫・小笠原 亮監修, 2001. 日本花名鑑 1. 304pp. アボック社, 東京.]

岩槻秀明, 2010. 野田市の造成地でダールベルデージーが出現. 千葉県植物誌資料 26: 256-257

箱根のササフローラについて (三樹和博)

よく知られているように箱根エリアには、県内でここだけに自生しているという植物も多く、箱根が基準産地となっている種も少なくない。ササ類においても広く多様な分布が見られる場所として興味深い。

まず箱根地域全体にかなりの面積で広がっているのがハコネダケ *Pleioblastus chino* (Franch. & Sav.) Makino form. *vaginatus* Muroi & Okamura というアズマネザサ *Pleioblastus chino* (Franch. & Sav.) Makino の品種である。葉がアズマネザサよりずっと小振りで、そのせいか群落密度もかなり高くなる。外輪山の登山道の左右をまさに壁のようにふさいでいる。かつては御殿場地方などにかけて、木舞竹やキセルのララの材料として生産されていたが、一斉開花により枯死し産業の衰退を余儀なくされたというエピソードをもった「ササ」である。芦ノ湖畔の植林地などにも生育しているが、植林後の年数の経過で次第に影が薄くなるようだ。また場所により母種のアズマネザサも見られる。

ハコネダケ同様開けた稜線部などに多いのがイブキザサ節 Sect. *Moniliclae* Nakai のトクガワザサ *Sasa tokugawana* Makino やミヤマクマザサ *Sasa hayatae* Makino で、樹林帯に入るとスズダケ *Sasamorpha borealis* (Hack.) Nakai に変わる傾向が見られる。スズダケはカルデラ内の林床も埋めており、冬季葉の縁に隈取りを見せる性質のクマスズと呼ばれるものも、スズダケと並んで群落をつくっているのに出会うことがある。

こうした基本種の他に、これらが関わって生まれたと思われる雑種起源種が多く分布しているのも箱根のササフローラの特色で、最も多いものはアズマザサ属 *Sasaella* Makino のササでありハコネダケやトクガワザサ同様箱根が基準産地とされているハコネメダケ *Sasaella sawadae* (Makino) Makino ex Koidz (アズマザサ *Sasaella ramosa* (Makino) Makino に含める見解もあり) で、多様に派生した形質をもったものが出現する。長尾峠周辺などを歩くと度々疑問種に遭遇する。現在では、アズマザサ属のササは、メダケ属 *Pleioblastus* Nakai のササとササ属 *Sasa* Makino & Shibata のいずれかの種との交雑により生まれたものと検証されているが、メダケ属のものにスズダケが関わって生まれたと思われるササにヤマキタダケ *Pleioblastus yamakitensis* (Makino) Makino がある。これも原記載のヒメスズダケ *Sasaella hisauchii* (Makino) Makino は箱根が基準産地になっており、箱根とその周辺地域であれば確認できる。

もう一つ雑種起源分類群とみられるのがスズザサ属 *Neosasamorpha* Tatew. のササであり、箱根ではアズマザサ属程の形質の錯綜ぶりは示さないが、やはり箱根を基準産地とするハコネナンプスズ *Neosasamorpha shimidzuana* (Makino) Koidz. は各地に出現する。これらの雑種起源種は県内各所にも出現するが、箱根地域以外では単独で現れることが多く、箱根では両親種と混生するケースも少なくなく、場合によっては形質の遺伝的な関連も推測させてくれるが、同定に頭を抱えることの方が多いのも事実である。

以上のように、箱根にはその周辺部を含めササ類の分布が多く観察材料には事欠かない。これは県内でも格段に多い雨量（雲霧を含んむ）が起因しているとも思われるが、地史的な要因もあつてかミヤコザサ節 Sect. *Crassinodi* Nakai のササは分布を見ない。また、寡雪地のため当然チマキザサ節 Sect. *Sasa*, チシマザサ節 Sect. *Macrochlamys* Nakai のササは分布していない。

以上簡単に箱根のササフローラの概略を挙げてみた。今後の調査の参考になれば幸いである。

参考文献

- 小林幹夫, 2005. 日本産タケ類の同定と分類. 福井総合植物園紀要, (3):1-18.
小林幹夫, 2011. 日本産タケ類における推定雑種分類群の存在意義と識別法. 東北植物研究, (16):1-15.
鈴木貞雄, 1996. 日本タケ科植物図鑑. 271pp. 聚海書林.
神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1584pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館.

丹沢にもヒメフタバランが分布する

(久江信雄)

2011年の6月下旬、丹沢山から続く尾根道を離れて少し進むと、モミの根元に *Listera* sp. (ラン科) の小さな葉が点々と見られた。この尾根でよく見ていたアオフタバラン *Listera makinoana* Ohwi は、葉が青緑色であるのに対して深緑色をしていたことからアオフタバラン以外のランであることを確信した。数えてみると15株ほどが散見され、その内の1株には枯れて傷んだ花が残っていた。この花は少なくとも1ヶ月以上前に開花したのだらうと思われた。同定の手がかりを求めて枯れた花をさらに詳細に観察したところ、花茎に鱗片葉は無く、唇弁基部の突起は細長く伸びて、蕊柱を抱いているようであった。その上に、

他のフタバラン属の花と比較して花期が早く、この時点の1～2ヶ月前に開花したと推定されたことから、このランは暖地生種のヒメフタバラン *Listera japonica* Blume であると考えた。

2012年4月29日、再びそのランのあった場所へ登った。周囲には9株があり、1株が写真のようにちょうど花を開いていて(図1)、それは正しくヒメフタバランであった。

今まで、ヒメフタバランは県内では箱根や愛川町、相模原市の三増峠付近にのみ分布するとされてきたが(秋山・佐宗, 2001, 久江, 2010, 勝山, 2006, 山口, 2008)、今回、丹沢にも分布することが明らかになった。

文献

- 秋山守・佐宗盈, 2001. ラン科 11. フタバラン属. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001, pp.496-499. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
久江信雄, 2010. 続 三増のヒメフタバラン. Flora Kanagawa, (69):837-838.
勝山輝男, 2006. ヒメフタバランが健在. Flora Kanagawa, (62):770-771.
山口勇一, 2008. 三増のヒメフタバラン. Flora Kanagawa, (67):820.



図1. ヒメフタバラン(愛甲郡清川村宮ヶ瀬 2012年4月29日 久江信雄撮影)。

2012 年度総会の報告

(事務局)

2012 年 4 月 15 日 (日), 生命の星・地球博物館
講義室において, 2012 年度の役員会・総会が開催
され, 報告・議事とも, 了承されました。また, 総
会終了後には, 国立科学博物館の海老原 淳氏に「シ
ダならでる, シダだからでる ～世界に誇る日本の
シダ植物調査・研究網～」と題した講演をいただき
ました。

● 2011 年度 事業報告

●各ブロックの活動報告

● 2012 年度 運営体制

● 2011 年度 決算報告・監査報告

● 2012 年度 予算

— — — — —

— — — — —

●調査会の活動中の傷害保険について

● 2011 年度 事業計画

●次の植物誌について（総会時の説明を抜粋）

目 次

大野好弘：アシガラスハマソウ（仮称）の発見.....	883
勝山輝男：神奈川県新産のオオハタガヤ.....	884
田村 淳：神奈川県産樹木 4 種の分布落穂拾い.....	884
馬場しのぶ：大和市・泉の森にセリモドキ.....	887
諏訪部 晶：愛川町でニッポンイヌノヒゲを採集.....	887
諏訪部 晶：相模原市内でキダチノネズミガヤを採集.....	888
諏訪部 晶：相模原市・愛川町でハイチゴザサを採集.....	888
支倉千賀子：川崎市多摩区や宮前区でもクゲヌマラン大量に発生.....	889
林 辰雄：ダールベルク・デージーの逸出帰化品.....	890
三樹和博：箱根のササフローラについて.....	890
久江信雄：丹沢にもヒメフタバランが分布する.....	891
事務局：2012 年度総会の報告.....	892
目次.....	894
事務局：標本同定会兼勉強会・『次の植物誌』のための調査アンケート.....	894

標本同定会兼勉強会

植物誌の調査のための標本の同定会を兼ねて、イネ科、カヤツリグサ科、イグサ科、タデ科、アカザ科、ヒユ科、キク科など、分類の困難な分類群の勉強会をはじめます。分類群によっては講師をお呼びして行うことも考えていますが、当面は生命の星・地球博物館の勝山が講師役を担います。会場は生命の星・地球博物館 3F 実習室、時間は午後 13:00 ～ 16:00。皆さんの参加をお待ちしております。神奈川県内で採集された標本で未同定のものがありましたらご持参ください。

日程：6 月 30 日（土）、7 月 16 日（祝）、9 月 23 日（日）、10 月 27 日（土）

会場や資料の都合で参加人数を把握したいので、参加される方は前日までに電子メールで勝山宛（katsu@nh.kanagawa-museum.jp）に連絡を入れてください。電子メールが使えない方は電話（0465-21-1515）でも結構です。

『次の植物誌』のための調査アンケート

今号には、次の調査へ向けての調査メッシュの担当希望アンケートと実施したい（参加したい）特別調査チーム希望アンケートを同封しました。回答をお待ちしております。

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000 円